らう。年代の新らしい爲めでもあらうが、建築意匠の均齊美と纖細明緻な彫刻に富むと、最も完全に近く保存されてゐるとの點から見れば、圓覺寺の塔は決して棲霞寺のそれに劣るものではない。彼の塔は實にパゴダ公園の名に恥ぢざる逸物である。彼此何れも大理石で、同じ位の高さで、隨處に彫刻を有する點に於て是非較照研究の價値があると思ふ。何れは純眞の信仰が心の內部から溢れ出て、自ら莊嚴崇高の形式美にリアライズされたものに違ひなからう。

こんな蛇足を喋々してゐれば限りはない。予は此の書を精讀し畢つて、吾等に人間のレゾンデートルを示し、ライフの目的を表はし、我等の運命を輝かして人生の東道たるべき純眞の藝術を味つた時と同じ感じを陶然と味はう事の出來たのを著者博士に深く感謝せねばならぬ。此の書が如何にシステマチックに出來てゐるかは、前後に附した緒言と巡禮行の成績たる發見、探求、紹介、藏經、儒道、佛道混交、蹈査、藝術、希望等を以て見ても一見瞭かである。元より專門學者に提供せんとの目的ではないのであるから、多少彼此の批評をする人もあるけれども、それは中學生がカントを評するに等しい。支那佛蹟調査の書としては、松本博士の『支那佛教遺物』出でゝより以來の大作で、敢て兩者を最近支那佛教資料書の双璧と申してよい。我々の社會の文化生活が近き將來に於て、斯る種類の名著を歡迎愛讀するほどに高上せんことの一日も速からんを望んで已まない次第である。(書中、伽藍殿觀等の平面圖を叮嚀に挿入されたは結構であるが、あれを鳥瞰圖と言ふのは果してどうでせうか。バードアーイヴュと言はんより寧ろプランに近いものでせう)。

東京、金尾文淵堂發行。定價八圓。(手島文書)

古事記及び日本書紀の新研究

津田左右吉著

本書題して「古事記及び日本書紀の新研究」といふが記紀の研究に於いて其の重要なる部分を占むべき所謂神代史に就いては既に著者の著書「神代史の新しい研究」があるため本書からは省かれ、又下の時代に於いては仲哀天皇(及び神功皇后)以前の部分に限られて居る。精密にいへば本書は卽ち記紀の一般的性質と其の神武天皇以後仲哀天皇(及び神功皇后)以前の部分とに對する研究である。著者は何故にこの時代を以つて其の研究の下限として居るかといふに之は古事記に於いて仲哀天皇以前のものは概して說話的色彩が強く歷史的事實として信ずべからざる不合理のことが多いからである。

今この記紀を上代史の資料として取扱ふには先づ之れが如何なる意味に於いて可能であり、又それに如何の價値があるかを明にしてかゝらねばならん、之れには記紀の內容の一々についての批判がいる、といふのが著者の見解である。

著者はかゝる見地から記紀の本文そのものゝ中に現れたる記述の前後矛盾及び同じ時代の同じ物語が記紀の二書に於いて種々の違つた形を以つて現はされてゐることを比較對照し記紀の叙述の不合理性不確實性を見、記紀の記事の多くを合理的史實として解釋する傳統的の觀方を排し、仲哀天皇を溯るに從て說話的色彩が愈強くなるとし、此等の記紀の記載はこれを史實として見るべき

でなく只思想上の事實、もしくは心理上の事實と考ふるに於て始めて眞の研究の門に入ることが出來るといふのである。

かくて著者は著者一流の多角形的な鋭敏な考察を以つて――しかも時に又著者の思考法の一面の弊(Fehler)な斷定も少くなく從つて其の批判の內容に就いては各人各樣の異見も起され得るであらうが――歷史的確實性の比較的に認めらるゝとする新羅征討の物語を始めとして年代順に逆行してクマソ征討の物語、東國及びエミシに關する物語、皇子分封の物語、崇神垂仁天皇二朝の物語、神武天皇東征の物語等を批判し、記紀の上代の部分の根據となつてゐる最初の帝紀舊辭は六世紀の初ごろの我が國の社會狀態に基づき當時の官府者の思想を以つて皇室の由來を說き、またいくらかの傳說の四世紀の終ごろからそろ〳〵世に遺しはじめられた記錄を材料として近い世の皇室の御事蹟を語つたものであり其の中でも持に上代の部分は約二世紀の長い間に幾樣の考を以つて幾度も潤色せられ變改せられて今に遺つてゐる記紀の記載となつたので、これをそのまゝ民族の歷史として認めることの出來ない點が多いがしかし之れに見ゐてゐる思想や風俗が物語の形成せられた時代の嚴然たる歷史的事實であることは勿論、全體の結構の上にも之れを貫通してゐる精神の上にも當時の人の政治觀國家觀が明瞭に現れてゐるのであるから上代の國家組織の根本精神を表現したものとして無上の價値を有する一大寶典であるとの結論に於いては大體に於いて吾人も同じき意見である。

然しながら記紀の上代の記載を說話と見るとしても此間に何等の合理的事實をも覗ふことの出來ないと考ふることは又餘りに極端であらう。例へば月面の影を見て月中兎ありと見るのは一の不合理なる說話としてそのまゝに價値あることであるが然し又これを科學的に考察して月面の高低に歸することも亦正當なる科學的說明である。勿論これが確實性を明證せんかためには著者もいつて居る如くに更にこの說話を離れた外國文獻、考古學、比較解剖學、比較言語學――この後の二科學よりの研究に就いては著　自身は事實上不可能であるとして否定してゐるが――等の知識よりする研究が是非なくてはならぬ。又これを說話と見るに就いても更に進んで土俗學、神話學、言語學、民族心理學――ヴントの所謂――等の如き知識によつて其の說話の有する人間精神の表現としての意義又は價値を闡明しなければならぬ。然し本書の目的は主として記紀に對する見方の闡明であつてこれ等の方面に對する積極的研究の成果を提供せるものではない。或は多少及んで居る部分もあるけれどもこれ等の點に就いては尙研究の除地が頗る多い。就中記紀の物語に於いて國家內部に於ける民族的競爭といふやうな思想の痕跡は少しも見えないといつてゐるのは決して穩當な說ではあるまい。若し假りにかゝる形迹は毫もなく、よしありとしても極めて不確實なりといふ認定が正當であると許され得るとしてもこれだけの理由を以つて直ちに「舊辭編纂の當時に於いて民族が一つであつて民族的反抗もしくは競爭といふやうなものが無かつた有力の證據」と見ることは決して出來ない。何となれば修史の事業は卽ち國家形成の一方策であり、このために國民をして共同の祖先より出でたりと信ぜしむる必要上この主旨に有害なる反對の傳說若しくは事實は出來得る限りこれを排除無視し

たものとも考ふることが出來るからである。只かゝる民族的融合が何れの時代に於て行はれたかに就いては昨年度に於ても學界の一大論爭となつた事で門外漢たる吾人の今是非をなすへき時期でない。

要するに著者が記紀に對する一々の批判の內容に對しては人々種々なる異議が起され得るであらうが然し記紀が主として皇室を中心とする物語であつて一般歷史としては最も不確實なることを有力に明證せる暗示的なる創見にみちた好著作として國史研究家は申すに及ばず、我國に於ける社會史、風俗史、道德史、文學史、文化史等の特殊史研究家の是非一讀すべきものであらう。東京洛陽堂發行。定價金四圓五拾錢。菊版五百二十八頁。（銅直　勇）

寄贈書籍雜誌

改刷經濟哲學の諸問題　法學博士　左右田喜一郎著　東京　岩波書店發行

哲學の一領域としての對象論の研究　法學士　田村德治著　東京　內外出版會社發行

哲學雜誌　丁酉倫理講演集、心理研究、東洋哲學、六合雜誌、日華公論、教育研究、內外教育評論、學校教育、教育、教育學術界、教育時論、國際聯盟、教育界、精神運動、